

Nicolas Terpstra;

*Lay Confraternities and
Civic Religion in
Renaissance Bologna*

ニコラス・テルプストラ著

『ルネサンス期ボローニヤにおける
俗人兄弟会と市民的信仰』

坂上 政美

本書は一五世紀から一六世紀における、ボローニヤの兄弟会 (Confraternità, Compagnia・兄弟団、信心会) について研究してきた著者の、一九八八年から一九九四年にかけての論文を中心にまとめた初の著作であり、ボローニヤの兄弟会研究においても最初の包括的な研究成果といえるものである。

一九七〇年代以前、信心団体としての側面のみが注目され、主に教会史の文脈において位置付けられてきた兄弟会研究は、社会的関心の拡大という歴史学の潮流の変化の中で、まず八〇年代初頭に、ソシアビリティの手法を導入したワイズマンやプラン等によって、転換期の都市における政治・社会構造の中に、新たに位置付けられた。その後、兄弟会や病院施設を、前近代社会におけ

る貧民救済上の役割に着目してとらえる傾向が高まり、フィレンツェを専門とするヘンダーソンを初めとして、我国でも河原温氏や高橋友子氏等の業績がある。これら先駆者の業績と手法を吸収した著者は、これまで扱われてこなかったボローニヤの兄弟会を取り上げ、その歴史的变化の中に位置付けようと試みている。

本書の構成は、第二章から第四章までが既発表論文であり、その理解を助けるために、背景となる政治、宗教的推移を第一章において概観し、第五章では、やや趣を変えて病院施設を中心に論じている。多岐に渡る論点をすべて紹介することはできないが、フィレンツェにおける兄弟会と社会構造との関係の解明を課題としている評者の関心を中心に、以下においてその幾つかを取り上げ、若干の論評を述べてみたい。

1. The early quattrocento: confraternities, observance movements, and civic cult

ここでは、本書のテーマ周辺の宗教的背景の概要と、考察対象とする一五世紀後半から一六世紀までの兄弟会を生み出した諸条件が示される。まず、一五世紀においてボローニヤの兄弟会は一つの転換期を迎えるとし、その背景となった要因を挙げる。第一の要因は、一四世紀末に北・中部イタリア都市に迫ったミラノの Visconti 家による脅威と、それが引き起こした聖母を奉じるビアンキの行進と呼ばれた都市規模の市民によるプロセッションの影響である。第二の要因としては、シスマによって失墜した教会権威の回復を目指す教皇庁の方針の下で、ボローニヤの司教に就任した厳格派 Niccolò Albergati (一四一七―一四五五) の、兄弟会推

進政策が挙げられる。在俗司祭と共に、一般の俗人信徒に対しても積極的な教化の必要性を認識していた Albergati は、兄弟会を、教会と俗人との間に接点を作り出すための手段と考え、彼によって一五世紀以降を特徴付ける新たな兄弟会の形態が作られたと言つてよい。そこには、コンタードや地区におけるローカルな宗教的シンボルをポローニャ全体の信仰の中心に拡大し、全市的規模を持たせた点、そして聖書劇の上演や壮大なプロセッションを実施させるなど、視覚的影響への配慮といった部分に、従来とは異なる兄弟会の儀礼上の重要な転換が看取できる。しかし、著者は以上のような見通しを示した上で、Benivoglio 家台頭と共に特に兄弟会の政治的性格が強化されることを認めつつも、兄弟会を政治的文脈を中心に検討することを避け、民衆宗教を再考する上で重視する。Albergati の死後、広範な社会層の市民、女性、子供までも取込んだ兄弟会は、著者によれば、市民の信仰生活の中心となつたのであり、兄弟会の運営、構造を考察することで、従来の教会史の観点からは得られなかった市民の信仰上の絆を明らかにし、都市生活の一面面を垣間見ることができるといふ、本書の核となる問題意識が打ち出されている。

2. Lay spirituality and confraternal worship

続く第二章では、上記の問題に対し、「兄弟会と托鉢修道会」、「集団儀礼に見られる信仰」、「個人儀礼に見られる信仰」、「死と臨終」と題された計四節において、規約に現れる様々な儀礼の検討を行い、一五世紀に現れる兄弟会とそれ以前のものと、差異、また托鉢修道会の儀礼との違いを示し、兄弟会信仰の独自性を浮

き彫りにすることが試みられる。Albergati の改革期には、シエナの Bernardino やヴェルチェッリの Manfredi といった厳格派修道士が、市民の信仰生活に対して大きな影響力を持ち、その影響下において多数の鞭打ち兄弟会 *disciplinati* が誕生、そしてその一派である *battuti* が創出された。これらは、一三世紀に起源を持つ *Compagnie Spirituali* と異なり、修道誓約を行わない俗人信徒の集まりでありながら瞑想、告解、鞭打ちの儀礼を重視し、新人会員には見習い期間を設けるなど、修道会会則を模倣した点に何より特徴があつたとされてきた。しかし同時に、規約の分析によつて、鞭打ち儀礼が形式化されてゆくこと、個人の内面的問題よりも、月例ミサそして物故会員の追悼ミサといった集会の方が重視されてゆくこと、運営の主導権は *ordinario* に就任する俗人信徒の側に握られていたことが明らかにされる。次に、会員の思想をより直接に探るべく、年代記の中の、公証人 *Benigno Mandolini* の一五三一年の臨終を巡る記述が検討される。そこには、ギルドの有力者に加え、故人が生前に所属していた複数に及ぶ兄弟会の会員と、そこで雇われていたドメニコ派修道士が弔いに集まっていた。兄弟会は、現世における親族、隣人、ギルドといった紐帯を越えた人間関係を作り出し、死後に対する保障を、より強固に幾重にも作り出す場であつたといえよう。追悼ミサの重視という点からも、兄弟会への参加の主要な目的は、まさに自分の死後における魂の救済の確保という点にあつたことが看取されるのであり、また複数の兄弟会への参加、救貧活動も、市民にとっては純粹な世俗的関心から説明できるものではなかつたのである。

フィレンツェ市民が兄弟会に参加した社会的背景については、ヘンダーソンの詳細な研究があるが、フィレンツェでは市民がコムーネ政府の葬儀に関する奢侈禁止令を逃れるために兄弟会に参加したことが指摘されており、兄弟会と葬儀との関係は注目に値する。今後、ポローニャの兄弟会に關しても、都市の法令との關係において更に検討する余地を残していると言えるだろう。また會員の信仰心の在り方を検討する上では、会内部で、聖職者あるいは俗人會員自身によって行われた説教の検討が有効であると思われるが、恐らく史料の限界からか、その点に言及されていないことが惜しまれる。

3. The mechanics of membership

本章は、「見習い會員と正會員」、「地理的構造と社会的地位」、「規模、發展、出席者」、「追放者」、「残留者」、「女性」、「小括」と題された計七節から構成され、ここでは會員録を主な史料とし、兄弟会を、その規模、會員の性別といった点から考察することによって、一五世紀の改革以降の兄弟会内部の構造を會員構成面から扱っている。フィレンツェを専門とするワイズマンは、會員の地理的分布の検討や統計的手法を會員録の考察に導入することで、一五世紀のフィレンツェでは、教区やゴンファローネを越えて市内全域から會員を集める兄弟会が存在していたことを指摘し、さらに、市民のライフサイクルの中に兄弟会を位置付け、フィレンツェ市民にとって、兄弟会とは政治的キャリアの踏み台としての役割をも果たしていたという点を強調した。本章において著者は、一五世紀以降のポローニャの兄弟会に起こった構造面での変化を、

敢えて異なる視点から考察し、ワイズマンの示した兄弟会のイメージに対して、新たな知見を加えようとしている。

従来、一五世紀の改革は、幾つかの兄弟会において、広範な市民の参加と共に、會員数の増大といった兄弟会の大型化をもたらしたとされてきた。しかし、ここでは、一四四二—一八一一年の Messer Geah Cristo 会（一四七二—一五五五年の S. Girolamo ed Anna 会などの會員録の統計的検討によって、死亡時まで一貫して正會員であった者が実は少数であったことが示される。例えば、S. Girolamo ed Anna 会ではこの期間、確かに入会者数は増加するものの、その多くが見習い期間や生前の間に退会している。つまり少数の固定した會員が核となって運営にあたり、その周辺を流動的な會員層が常に入れ代わりながら取り巻いていたのである。また一四世紀まで見られた女性や職人層の参加も、次第に減少していき、これは *disciplinari* や *battuti* ほどその特徴が顕著であった。Albergati の改革は、従来になかった規模で、市民の兄弟会への参加と関心を呼び起こしたが、この兄弟会の「全市民」化は、同時に、職人や女性を排除し、有力市民の閉鎖的な兄弟会を誕生させるという逆説的な結果をもたらしたのだった。

中世末期、様々な兄弟会において、會員の社会層や数において変化が見られることは、フィレンツェの例からも首肯できる。著者はさらに、退会者の多さに注目することで、兄弟会が構造上いかなる変化を被っていたのかという点において、より具体的な像を示し得たといえるだろう。しかし、ここで実際に使用されている史料は大半が一六世紀のものであり、Albergati の改革以後の兄弟会の変化を実証しようとするならば、より通時的な史料の分

析が必要となってくるのではないだろうか。また有力市民への主導権の移動を指摘する一方で、ポローニャの兄弟会は、フィレンツェやヴェネツィアの場合と異なり、内部で、政治的キャリアに繋がる密な人的結合関係が存在しなかったと述べているが、この部分については判断の根拠が曖昧で、推測に基づく部分が多いことに不満が残る。むしろフィレンツェのカタストのような対照史料に恵まれなかったことが、ポローニャの兄弟会の場合、政治的社会的意味を明らかにする妨げとなったという可能性はないだろうか。

4. Communal identity, administration and finances

本章では兄弟会の信仰の内容と、組織としての構造の変化、特に兄弟会の役職と財産との関係を中心に、「共同体」、「運営」、「収入・財産・義務」と題する三節において考察している。

Alberghati の改革は、幾つかの兄弟会からローカル性を排除したが、その際、大聖堂への祭壇の移転や、「Maddonna del Monte」のように一地区の信仰のシンボルが、全市民的信仰の対象にまで高められるといった特徴が現れた。しかし、このような状況がもたらす組織の巨大化、運営資金の増加、事務の煩雑化といった現象は、一四世紀以前の、小規模かつ素朴な民間信仰の一形態としての兄弟会の在り方を、運営面、構造面から揺るがす結果をもたらす。S. Maria della Morte 会や S. Maria dei Servi 会など富裕であった兄弟会では、礼拝堂の新設や祭壇の移動、さらに下部組織として少年兄弟会や病院の運営に着手し始めるが、これは内部で、事務に携わる会員と儀礼のみに参加する会員との区別

を生み出した。また同時に、Notario（公証人）など事務に長けた専門職の者や Massaro や Depositario などの役職を常置する傾向も一般化するようになる。この点でも、教会や修道会の影響よりも俗人主体の運営形態への移行が示されているといつてよいだろう。

また財源の性格も変化した。一四世紀のベスト大流行以後、多くの兄弟会では、寄進・遺贈が増加し、フィレンツェのオルサンミケーレ会のように、豊富な資金力を持つ兄弟会も現れた。しかし、一五世紀末以降、ポローニャの兄弟会では、市内やコンタードにおいて会が所有する土地や家屋からの地代・賃貸収入が主な財源となり始め、一五〇五年の S. Sebastiano e Rocco 会の年間収入ではその大半が地代収入と公債による利子収入によって占められているのである。これは、有力市民による不動産獲得の傾向、所謂「土地への回帰」と連動しており、運営主体が有力市民の手に移るにしたがって、彼らの資産に対する考え方が反映されたと、著者は強調する。

兄弟会の財源については、都市ごとまたは会ごとに、詳細かつ様々な実態が近年明らかにされておられ、本章の分析は比較史的観点からも興味深い考察である。ところで、兄弟会の運営に携わる役職の種類やその数の推移を検討することで、その会の社会的性格を探る視点は有益だが、史料上の制約からか、個々の役職にどのような社会層の市民が就任していたのかという点にまで踏み込めていないのは残念である。また、運営形態の分析について、やはり一五世紀以前の史料はほとんど使用されていないため、兄弟会が地代収入への依存を強めていった時期が具体的に実証されて

いない点にも不満が残る。

5. Confraternal charity and the civic cult

in the late fifteenth and early sixteenth centuries

本書の締括りとして、市民による私的な信仰団体であり、教会や修道会などの指導下にあった兄弟会が、どのような過程を経て、一六世紀には、政府や有力市民といった世俗権力の管理下に移り半公的な性格を持つに至ったかが、主として、兄弟会が運営する病院施設の側面から検討される。本章は三節構成で、順に「シニョーレ体制からsenato(元老院)による寡頭支配へ」、「兄弟会的病院施設から国家的貧民救済へ」、「全市民的信仰の発展」と題されている。

まず、一五世紀末の、イタリア半島の勢力均衡とその崩壊という国際状況の変動の中で、常に大国の影響を受けてきたポローニャの政治的推移が概観される。一五世紀、シニョーレの地位にあったBentivoglio家の勢力基盤は、実は、ミラノとフィレンツェという二大勢力の支持の上に築かれたものだったが、一五世紀末の、シャルルのイタリア侵攻、メディチ家の追放といった国際情勢の変化の中で、政治的支持者を失ったBentivoglio家は追放され、他の有力市民はSenatoを形成し、今度は教皇庁を保護者とする集団指導体制への道を選んだ。単独のシニョーレを排すことで、制度上政治権力の頂点に立ったSenato層の有力市民は、自らを都市の秩序の管理者であり、宗教施設のパトロンであるとする自負心をも育てていくことになった。次いで、兄弟会による貧民救済上の性格の変化が、兄弟会が運営する病院施設に焦点を

当てることで具体的に検討され、S. Maria degli Angeli, S. Giobbe, S. Maria del Braccano, S. Bartolomeo di Reno, S. Sordaniの病院の例を通して、これらが所謂「キリストの貧者」を対象とする施設から、実質的な貧者の保護と矯正という近代的な慈善施設へと病院が変化する過程を跡付けている。一五二七年の疫病流行、続く一五五八年、一五六一年の飢饉の発生は、都市部及びコンタードにおける大量の乞食と孤児の出現という、都市生活上、深刻な問題を引き起こし、従来、巡礼の宿泊所であった幾つかの病院施設が、組織的な捨児養育院へと合併・再編される契機となる。しかもそれらは、貧民の選別と矯正という近代的救貧観の特徴を備えた施設に生まれ変わっていた。一六世紀のS. Maria del Braccano病院では、両親をポローニャ人とし、物乞いなどの悪習の経験を持たない一〇才から一二才までの孤児のみを収容すると規定しており、孤児への手工業技術と教育の付与、女兒に対しては嫁資の授与など、孤児に対する社会的更正を目的とした運営が行われていたのである。ところで、近代初期は、都市市民の救貧観の変化上の転機となる時期である。しかし、著者はここで、病院が伝統的救貧団体から脱却していく上では、都市を席卷した疫病の社会的、心理的被害の影響よりも、むしろ、兄弟会や病院運営に対して豊富な資金や政治的援助を提供しうるSenato市民の関与とこの点に注目する。S. Maria del Braccano病院の運営母体であった兄弟会では、二七三名の会員の内、実に過半数が支配階層に属する市民であり、このことが兄弟会と病院に対して、何よりも豊富な資金力、そして、教皇からの贖宥の付与や政府の保護といった特権を与え、半公的団体へと脱却さ

せることになったのである。そして、最後に、著者は兄弟会の運営に参加し、その構面での変化の大きな要因であった *Senato*

市民の宗教意識について言及する。一五世紀までの兄弟会は、その地区や教区において信仰されるローカルな聖人を祀るためのものであり、必然的にその維持、管理は、職人層をも多数包含した地区住民の手によって行われていた。しかし一六世紀、*Senato* 市民が兄弟会の管理に着手するに及んで、ローカルな信仰対象であったものが、全市的規模で崇拜されるようになり、またこの傾向は、祝祭の劇場的効果によって、*Senato* 層がその権威を誇示するという目的、そして、市民信仰の中心もまた自らの手によって管理するべきであるという意識の発生によって助長されていった。本章は、まとめとしての性格が強く、前章まで述べてきた主張を近代的病院施設の誕生という文脈の中で再度検証したものであるといえよう。ただ、そうした施設の誕生を可能とした、兄弟会に実際に参加している政治支配者層によって、当時の知識人によって唱えられた救貧観がどの程度受け入れられ、現実の運営に反映されていたのかという問題は未解決のままである。また、知識人層による救貧観の変化が病院の役割に影響を与えたというのは、この問題を考察する上での前提となる一側面にすぎない。むしろ、そうした枠組の中で、兄弟会の下部組織であった病院施設が実際に社会の中で形成していった独自の性格、役割を考慮し、他の救貧施設との関係を明らかにしていく必要があるのではないだろうか。しかし、著者の述べるポローニャの兄弟会・病院施設による貧民救済活動は、プランを始めとするイタリア都市における兄弟会の救貧活動の研究に貢献するものであり、個別都市にお

けるより具体的な実態の解明という点で意義深い。

以上、本書の内容紹介と若干の論評を行ってきたが、最後に全体に関する評者の感想を述べておきたい。一部の宗教的リーダーによって市民の兄弟会への関心が高められ、新たなタイプの兄弟会が成立したことは、その経緯や性格に関し、同時期のフィレンツェやヴェネツィアの兄弟会の場合と似通う点が多い。このことは、中世末期のイタリア都市が共通して抱えていた構造的な問題が、兄弟会現象に反映されていることを示していると考えられるだろう。もちろん著者が強調するように、兄弟会現象は政治的解釈にのみ帰される問題ではないが、第三章、第四章で示された結果は、都市内の階層分化の進展や、特に、自治都市から国家体制への脱皮の過程における政府や教皇庁との力関係の中で、今後更に発展させ、解釈し得る可能性を与えたといえるのではないだろうか。また、著者が強調するように、ポローニャの兄弟会が何ら政治的役割を果たし得る文脈に置かれることがなかったとすれば、他都市に対し、なぜそうした特徴をもったのかということも、社会構造の面から明らかにすることも必要となってくるであろう。とはいえ、従来個々の兄弟会の実証研究が散発的に行われているに留まっていたポローニャに関し、それらをまとめて、中世末期の政治的、社会的、宗教的状况の中へ歴史的に位置付けたという点において、重要な著作であることは疑うべくもない。特に、教皇庁との関係におけるポローニャの独自性が配慮されたことは注目され、対抗宗教改革期の兄弟会の構造や市民の参加の問題を扱う際に、都市政府と教皇庁という権力構造の中で兄弟会を扱う

という、より大きな枠組みを提示したといえるだろう。また、近年関心を集めている、救貧観の推移の問題や、中世末期の都市における兄弟会や病院の救貧活動上の意義を問う研究においても、大きな貢献を為すと思われる。研究史上豊かな蓄積を持つ一部の都市を中心に、今日までこれらの研究は進められ、我国においても、そうした研究が主に紹介されてきたが、そこから得られる像を安易に一般化して捉えることには猶慎重な姿勢が必要であることを本書は教えてくれるのであり、個別都市における実態の解明という点において、著者は確固たる進展をもたらしたといえるだろう。本書は、ポロニーヤ史研究にとつても、そしてイタリア諸都市における兄弟会の比較研究を行う上でも、重要な意義をもつことは疑問の余地がない。

(京都大学大学院博士後期課程)